

秋田高校同窓会新先蹤録委員会 編
▶新先蹤録
秋田高校を飛び立った俊英たち
9・1刊 A5変型判360頁 本体2000円
春風社



未来への信頼を感じることが できる

語り継ぐ記憶として丹念に形にした努力の賜物

末松裕基

本書は、秋田高校創立150周年を記念し刊行されたもので、各方面で幅広く活躍してきた同窓生38名の人生の歩みがまとめられている。「先蹤」は先人の事跡のこと、同校130周年に『先蹤録』が編まれたことから、書名は『新先蹤録』となっている。登場人物の人生に共通して見られる特徴を挙げると、まずはその粘り強さである。

元国連事務次長の明石康氏は、報いられることは少ないが困難に徹底的にぶつかり努力して前へ進むことの重要性を説く。その他、訪問看護師の黎明期を切り拓いた秋山正子氏、その探究心で白神こたま酵母を発見した小玉健吉氏、就職年に五輪出場も会社で無差別・無欠勤を貫いた元早大競走部監督の鈴木重晴氏、「俺は幸せだった」「選手たちはかわいくて、掛け替えのない存在であり、自分の生きがいであった」と語った。大学生でペーシング海映横断計画を采司法長官に直談判し、後に直木賞作家となった西木正明氏。「悲哀や挫折の連続こそが人生」と語る。重慶の吃苦を経験し、人の物語への興味から、能、歌舞伎の作品も書いた劇作家の野口達二氏。「毎日緊張し、そして学

ぶととする姿勢がないといけ
ない」と謙虚さが光るジャー
ナリストの橋本五郎氏。
続いての特徴が、志の高さ
である。
心理学者の伊東博氏は自ら
尽力したカウンセリングの普
及に疑念を抱き、現状に甘ん
じず前向きに問い直す姿勢を
示す。卓球世界王者の木村興
治氏は毎日砂を10粒落とすよ
うな地道な練習が高い山を乗
くために必要な裾野の広さに
驚かるとして、子どもたちに
は志を高く持ち「当たり前
のように自分に高い要求を課し
てほしい」と願う。これらは
人間の存在に対する思索を人
生の中心に据えたとした実業
家の小玉得太郎氏に見られる
ような人間への強い思いが深
く関わっていると言える。た
だそれは弱冠なものではな
く、政治学者の佐々木毅氏が
大思想家との対話の楽しみは
どこかのオジサンと雑談をし
ている感じと言ふようにほど
よく肩の力が抜けている。
そしてこれらに共通する次
の特徴は反骨心である。

当時、昭和期史料が少なく
「よし、なければ自分で探す」
とした歴史学者の伊藤隆氏
や、日本のリーダー技術の選
れを「通信技術を学んで見返
したい」と後にデジタルデー
タの磁気記録術を作り上げた
工学者の岩崎俊一氏。地方出
身者の交流の場「若い根っこ
の会」をつくった社会運動家
の加藤日出男氏。廃業寸前で
も理想高く高品質の酒造りを
実現した蔵元の齋藤昭一郎
氏。「ちょっと待て」と社会
に水を差した『面白半分』発
行人の佐藤嘉尚氏。教師を感
ずり退学処分後、フランスでシ
スタンス運動にも加わった

この点に関わって、美術史
家の山梨絵美子氏は「美術作
品ともある生活の原点は
秋田での暮らしにある」と述
べる。母との散歩中に狒狒は
阿吽を意味することを教わり
「形は何か深い意味や古い歴
史を持っていることを印象づ
けられるなど、文化的なもの
にも触れた」とする。政治学
者の佐々木毅氏は「秋田で若
い時代を過ごしたということ
を大切にしよう」という共通の感
覚「の重要性」とそれをより
良いものに育てていくこと
の意義を語る。また、元東
北大学総長の吉本高志氏は
「秋田の海が大好きです。人
生は順風満帆ではありませ
ん。四季、真夏の海に沈む大
きな太陽、白い波頭が幾重に
も押し寄せる真冬の海、その
時々心に癒され再び現実に
戻ってゆくことを大切にす
きました」と語る。
教育は文化的な営みだが、
文化(culture)は「耕す・
栽培する(cultivate)」から
生まれた言葉である。つまり
丹念に耕していい実を結ば
せるという意味である。先の
鈴木校長と同期生の元秋田県
知事の小畑二郎氏は「どん
なに善い政治をやっていたと
しても、教育に根柢を置かな
い政治や行政は、根なし草
らのようなもので、パッと咲
いてもすぐ枯れてしまう」と
生涯教育を県政の柱に据え
た。
秋田高校という「養母」は、
在校時に教わった教員だけ
はなく、同窓の仲間、秋田と
いう大地と故郷の海が人を支
える。人はその支えによって
安心と励ましを感じ、目標や
抱負を糧に新たな挑戦が可
能となり実を結ぶのではない
だろうか。本書のような誠実
な取り組みによって「養母」